ファミリー 家族の本

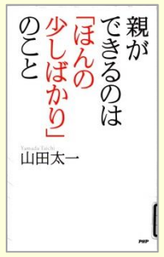
異動や進学で家族と離れ離れになる方も多いこの季節。今回の特集は「家族」の本を集めてみました。あらためて家族について考えてみてはいかがでしょうか。

※今号で紹介した資料は最新号期間中「ぷらっつ☆篠崎コーナー」に展示しています。

『家訓づくりのすすめ』

浅見　政資著
東洋経済新報社
159ア
篠崎ほか所蔵

家庭の危機を救うもの、ひいては、家族を強い絆で結ぶ有効な方策……それは「家訓」ではないかと著者は問いかけます。家族のありかたに何かしらの課題を感じている人は、本書の家訓サンプルを参考に「家訓づくり」を試してみてはいかがでしょうか。名家の家訓も興味深いです。



『親ができるのは「ほんの少しばかり」のこと』

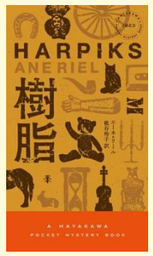
山田　太一著
PHP研究所
367.3ヤ
篠崎ほか所蔵

様々な人間模様を描いてきた脚本家が語る親子、家族とは。それは、人にとって大切なことを気づかせてくれる場所……。思い込みを捨てて、違う側面から家族とつきあってみればと著者は言います。心が軽くなり、そして、人間そのものが愛おしくなってきます。

『バージェス家の出来事』

エリザベス・ストラウト著
小川 高義訳
早川書房
933ス
篠崎ほか所蔵

妹の息子の犯罪をきっかけに、揺らぎ始める三兄妹の人生。それは三人が心に秘めていた幼い頃の悲劇の記憶にも及んで……。一度起きた揺れは止まることなく、兄妹の関係性や生き方を大きく変えていく。それぞれが踏み出すことになる新たな道には仄かな明かりが見える気がする。



『樹脂』

エーネ・リール著
枇谷　玲子訳
早川書房
949リ
篠崎ほか所蔵

「私にはわからないの。私たちが過ごした日々を冒険と呼ぶべきか、ホラーと呼ぶべきか」常軌を逸した父、巨大化し身動きできない母のもと、隔絶された半島で成長する少女。一家の生活は理解しがたい方向へと崩れ落ちていく。全編に漂う不気味で不穏な匂いから逃れたいのに、頁をめくる手を止められない！

『よっつ屋根の下』

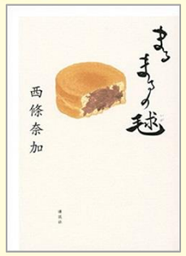
大崎　梢著
光文社
Fオ
篠崎所蔵

平山家は裕福で幸せな4人家族だった。ある時、医師の父が勤める病院で医療ミスが起きる。この件がきっかけで家族は気持ちも住まいもバラバラに。一家はどうなるのか？　描かれる10年の間に訪れるそれぞれの転機。彼らの決断にエールを送りたくなる。

『湘南ランナーズ・ハイ』

倉阪　鬼一郎著
出版芸術社
Fク
篠崎ほか所蔵

海沿いを走る、湘南のマラソンコースという清々しい舞台。「湘南国際マラソン」で完走を目指す主婦の幸子と、走者の父を持つ夏乃。彼女たちを取りまくふたつの家族のストーリーは、終始爽やかで、じーんと来ます。



『まるまるの毬』

西條　奈加著
講談社
Fサ
篠崎ほか所蔵

看板となる菓子を持たず、日替わりで諸国の菓子を出す江戸・麹町の菓子屋「南星屋」。ある秘密を持つ主人の治兵衛、出戻りの娘・お永、看板娘の孫・お君の三世代で切り盛りするお店を舞台に様々な事件が起こる。お菓子が繋ぐ家族の絆に、心がほっこりしました。

『信長と信忠』

鈴木　輝一郎著
毎日新聞社
Fス
篠崎ほか所蔵

戦国時代、天下布武を唱え、全国制覇を目指した織田信長。その信長の父としての顔に焦点を当てた歴史小説。年齢を重ねるごとに自分の老いを感じ、嫡子・信忠をはじめ、子ども達への接し方に苦悩する姿が描かれている。今までの信長像とは異なる、人間信長に出会える作品です。

『平成大家族』

中島　京子著
集英社
BFナ
篠崎ほか所蔵

仕事を引退し、余生を送るばかりの一家の主のもとに訳有りで出戻ってきた娘たち。妻と妻の母親、引きこもりの息子との生活が一気に大所帯となるが、家族それぞれの想いは……。悩み多き一家の姿を、笑い、驚き、切ない想いなどと共に描く家族小説。

「人ごと」
（『深追い』所収）

横山　秀夫著
新潮文庫
BFヨ
篠崎ほか所蔵

警察署の会計課職員・西脇が遺失物の落とし主・多々良の家を訪ねると、そこは独居老人宅にそぐわないタワーマンションの最上階だった……。西脇と姉、多々良と娘たち、それぞれに描かれる確執の様子がリアル。肉親だからこそ素直になれないもどかしさ、切なさに心を抉られるようだ。